

ICUの学生に期待するもの

山本 達郎 著

国際基督教大学

ICUの学生に期待するもの

昭和49年度ICU入学式記念講演

山本達郎

新しく入学された学部学生諸君、大学院の学生諸君に對しまして、心からお祝いを申し上げます。諸君の入学はみなさんの一人一人の喜びであるばかりでなくて、諸君を育ててこられた、そして愛して、助けてこられたご両親や、周囲の方々の深い喜びであります。また同時に大学のすべての人々の喜びであります。きょうから始まる諸君のICUの生活に關して、諸君はいろんな期待と希望とを持っておられるわけです。諸君ばかりではなくて、諸君の周囲の方、ICUの一人一人、我々はみな諸君に對して大きな希望と期待とを持っているわけです。私はこの入学式の日、私が諸君に對してどういう期待を持っているかということを、これを大学の一員としてお話しみたいと思います。

諸君が大学生活を送る現在の時代というのは大変に大きな世界的な變動の時代、世界の情勢、國際情勢が大きくかわっております。日本の社会・文化・政治・經濟すべてが大きく変化しています。諸君がよく知っておられるように資源問題、人口問題、食糧問題、公害問題というような、今まで第二次世界大戦まではおよそ考えられなかったような大きな問題が、我々の前に立ちはだかっているわけで

す。また原水爆の問題があります。現在人間の持つている危険な原水爆をもしもみんな使ったならば、人類全体がたちまちのうちに滅んでしまふかもしれないという、そういう危険な状態の中に我々は住んでいるわけです。そして世界が変わると同時に大学も変わっております。大学が、質もかなり量も変わっている。現在日本にいくつの大学があるかといえますと、九百の大学があります。四年生の大学が四百五・短期大学が五百で、九百以上の大学があります、ここで研究され、教授されている内容が急速に変わっている。変化すると同時に知識はどんどん増えているわけです。この間、諸君が受けた入学試験で、私は試験の監督をやっていたわけですが、どういう問題が出るだろうかと思って次々に配られる問題を読んでいったんです。自分の専門に近いところだけみても、私どもが学校でおそわった内容とは大変にちがった内容になっているので、私が諸君と一緒にICUの試験を受けたら、たぶん落第するだろう、と思ったわけです。それほどにちがっています。こういうような変化の時代にあつて諸君自身が変化しているわけです。社会的に変化しているばかりでない。諸君自身の一生の中で変化の時期に当っている。おそらく多くの方々に、新入生の方々はこの大学に在る間に成年に達せられるでしょう。精神的にも、肉体的にも、法律的にも、一人の人間として独立されるようになるだろうと思います。こういう諸君自身の変化がこの大学の在学中におこる。諸君は大学で身につけたものをもつて社会に出られるわけですね。今までの学校の勉強とは全然ちがった勉強をここでしなくてはならない。それではこういうふうにこの世界が変化し、大学が変化し、諸君自身が変化している時に我々はいったいどういう勉強をしたらいいのか、どういうことをICUでやったらいいだろうかという問題であります、諸君の中にはすでにこの大学で何をやるか決めておられる方がかなりあるかもしれない。どういう企業に就職しようとか、あるいは先生になろうとか、社会奉仕をしようとか、

国際機関に働こうとか、いろいろな希望をもっていらっしゃる方があるだろうと思います、そうでなく、何をしたらいいかわからない、という方もたくさんあるだろうと思います。諸君はこの大学に在る間に何をしようか、将来何をしようかということに対しても、ゆつくり考えていただかなければならないと思います。こういう変化の時代に諸君が一人の人間として、将来の道をはっきりと歩む決定をしなければならぬというわけです。私はやはりこの際に、いったいこういう変動期の大学で、どういうことを我々はしたらいいのかという、大学の根本的な問題をいくつか考えてみたいと思います。問題はたくさんありますけれども、きょうはそのうち四つばかり取り上げてお話してみたいと思います。

いったい大学というのはどういうところか。大学は真理を追求するところである。だれでもいうことです。私どもは今大学の問題を考えるにあたりまして、根本的であると同時に常識的な問題を考える必要があると思います。大学は真理を追求するところである。追い求めていくところ、追い求めていくところがあります、追い求めて真理を追求するというのは、どこまでも新しいものを求めていく。新しいものを作っていくという、そういうところですね。我々はいつも新しいものを作り出す、クリエイティブな心の状態を持っていなければなりません。諸君が学校、中学校、高等学校にあるいは大学まで行かれた方もあるでしょうが、これまで学校で勉強されたことの大部分は、すでにでき上がった学問の結果を受け継いで学んでこられたわけです。ところが大学の勉強というのは根本的に性質がちがう。もちろん今までの学校でも受け入れるばかりではない、自分から作り出す練習はされたでしょう。しかし、大学というものは本質的に新しいものを作り出していくところであるこ

とを、諸君ははっきりとまず、とらえていただきたい。今までの学びとる勉強で秀才であつた人が、必ずしも作り出す勉強で秀才であるとは限りません。秀才とか才媛とかいわれた人が、全然基準がちがつてきて、別な人になるかも知れません。そして私は大学で真理を追求するというのは、非常にきびしいものであるということをまず第一に知っていただきたい。我々が真理に本当に立ち向かひまして、真理を求めていくというのは本当にきびしいものです。厳肅なものです。しかしまたそれと同時に真理を求めてこれを追求していくことは、まことに楽しいものです。厳肅なものであつて同時に楽しいものだということです。私どもは試験勉強などをやつておりまして、ことに入学試験の勉強をやつて、こういうところをおぼえていなければならぬとか、こういう問題が出るかもしれないとか考へているときには、本当に真理を追求するという気分にはなれません。試験勉強をして本当に学問が好きになつた人というのは、これは大変に少ない。あるかも知れませんが例外ですね、我々がこれから勉強するのはそれとはちがつて、自分のほうから真理に向かつて近づいていくきびしい勉強である、けれども、それがまた本当に楽しいものであるということを味わつていただきたい。諸君に期待することは、大学の生活の中で、諸君が本当に学問をすることは楽しいものだということをはっきりとらえていただきたいということです。真理というのは、ちよつと考へると大変遠い所にあるようであります。世界の偉人とか天才とかいう人々が、何千年にわたつて探し求めてきてどこにあるかわからないというようなものです。しかしそれはまた、遠いようでいて同時にまったく身近なものです。我々一人一人の身近なところに真理というものは存在している。諸君はこの真理を見出す能力、洞察力、を持つようになつていただきたいと思ひます。

第二に問題としたいと思ひますのは、大学は人間を作るところである、人格を養成する場所である、

ということであります。これもわかつているといわれるかもしれませんが、学問を研究したり、習ったりすることは大学でやる、だけれども大学は本当に人間を作る場所なんでしょうかといつて疑問を持つ人がありますね。確かに大学が学問の切り売りをやっている、知識の切り売りの場所になっている場合は実際にいくらもあります、あの人は学問はできるけれども、どうも人間としてなっていない、尊敬できない。そういう人は学生の間にも、先生の間にも、いろいろあることを諸君は知っておられると思う。それでいいでしょうか。大学というところは、現在いろんな欠陥があるかもしれませんが、せんでも、本質的に人間を作るところでなければなりません。これは重要な点であります。最近日本の学校教育に関して、知育の偏重だとか徳育の必要だとかいうことがいわれているのはご承知のとおりです。教育基本法の大学に関するところをご覧になりますと、大学は学術を教えたり研究したりする場所である、そして知的・道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とすると書いてあります。知的・道徳的・応用的といっています。私どもは今、こういうような世間の批評とか教育基本法に書いてある内容とかにとらわれる必要はありませんけれども、大学は本来人間を作るところであるという意見に対しては、謙虚に耳を傾けて考えなければなりません。大学は人を作るといっても、いろんな作り方、出来方があるわけですが、ここでは重要な問題を一つだけとりあげて申し上げておきたいと思います。それは、大学というのは学問をやつて知識をふやすという他に、また道徳を必要とする、知識も必要で道徳も必要であるというふうに並べてこれを理解するというような理解の仕方ではいけない。そうではなくて大学で我々は真実の前に謙遜になつて真理を追求していくその過程の中で本当に人間というものが育つていくことであります。真理の追求というのは先程申しましたように、決してなまやさしいものではない。それでは真理を追求する場合に最も必要なものは何か。

必要なものはいろいろありますが、その中で最も必要な資源、最も大きく要求されるものは何であるかという点、それは謙遜である。真理に対して、その前に謙遜でなければ、本当の学問はできません。自分でいろいろなものを知っているけれども、それがまちがっているかもしれないといって新しい問題を求めていく。自分はいろんな学説を持ち理論を持っている。しかし、考えてごらん下さい。それが本当に正しいという点は何によって保証されているのでしょうか。本当に我々が正しいと思っっている学問の内容を捨てなければいけないことが度々おこります。そして、これまでの考えを捨て、前に進んでいかなければならない。いろいろな実験をやる場合に、百の実験をやって九十九まで自分の思ったような結果が出たけれども、一つだけちがっていたということがある。その一つが重要な意味を持つている場合があることは、学問のいろいろな先輩が教えているところです。私どもは常に謙虚でなければいけない。私どもが真理の前に謙虚であるということを本当に深く考えて勉強すれば、そこに人間を作る大きな問題が含まれています。我々はいったい自然とか人間とか社会とかいうものを考えていく上で、どういうところにどんな問題があるのだろうか。そういう問題を深く考えていくところに、私どもの人格形成の大きな課題があり、また進歩があるわけです。

第三の点は、大学というところは、我々一人一人が、個人として個人を明確にし、個人として考え、個人としての行動の責任をとる。それを明確にするところであるということです。諸君は先程入学式で名前を呼ばれて、一人一人立ち上がったわけですね。大学は決して諸君を集団として考えておりません。一人一人の諸君の人格の独立性、そしてその責任をはっきりさせている。学問の中にはいろいろ共同研究というものが必要とすることがあります。大勢の人が集まって共同研究をすることがありますけれども、よく考えてみますと共同に研究しましても本当に新しいアイディアを持ち、新しいもの

を作り出すのは、その共同研究をやっている人の中のどれか一人であります。世界の歴史を考えてもらになれば、いかに大きな宗教、大きな思想というものが、一人から生まれているかよくわかりますが、これは大切なことであります。諸君はこの一人の功績、一人の責任ということを明確にしてくださいと思うのです。有名な孟子の言葉で、ご存知だと思いますけれども「自ら省みてなければ、千万人といえども、我ゆかん」というのがありますね。自分で反省してみても、自分で考えてみて、正しいと思えば千万人の敵があつても、私は私の道を行くという、これは非常に大切なことであると思います。このごろは学校で義務教育の時から、ホームルームというのがありますし、諸君はいろんなところで集団でものを考える訓練を経てきているだろうと思います。大勢の人がいて、その中で多数の意見に従う、多数の人が好んでいるからそっちについていくということがよくあります。しかし大勢の人が好むものの、きめるものが正しいという保証はどこにあるのでしょうか。大勢の人はそう思っているけれどもあなた自身は、一人一人、あなたはどうか考えるのか、という訓練を諸君はどれだけ受けてきたか私は知りません、大学で一番重要なことは、大勢の人はこう考えるけれども、諸君は、あなたは、一人一人はどう考えるかということです。私どもが大学で勉強するのは自分で考えなければいけない。自分の意見を持たなければいけない。どんな偉い先生でも、どんな偉い学者でも、そのいったことをそのまま正しいとして受けとるのは、これは本当の学問に対する態度ではないわけです。どんなに権威のある人の学説でも自身で考えて判断しなければいけない。もちろん学問には多くの伝統がありますし、前の時代から受けつがなければならぬたくさんのものがあります。我々はそれを受け取って作り出していくわけで勝手にやればいいものではありません。ですけれども常に我々は個人から生れる考えと責任というものを尊重していかなければならない。これは特に日本人、

諸君は大部分日本人ですけれども。日本の人にとって特に必要です。日本の文化の特色がどういふものであるかということは、これからいろいろ諸君が研究されるだろうと思いますが、よくいわれる日本の文化の特色として「恥の文化」というのがあります。ルース・ベネディクトのいった言葉であります。我々はどうも世間を気にしている。ほかの人が自分をどう見ているだろうかということが気になる。他人に笑われたくない、恥をかきたくない、ほかの人がみなこういつているからどうも自分が別なことをいうのは恥かしいという気持です。自分の外に行動の基準がある。しかし大学の生活はそうではなくて、私どもは自分の中に基準を持たなければいけない。先程の孟子の言葉でも自分の中に自ら省みて、自分の中に問題を求めている。諸君は一人一人が外を見る前に、まず自分を見なければならぬ。自分を掘り下げて考えるということをしなければいけないわけです。西洋の多くの国々では自分の意見を持たない人というのは尊敬されません。諸君が将来世間に出て活動するという場合に、その人がどういふ人であるかという、個人としての性質が明確な人でなければ、最終的な信頼を得ることはできません。この問題は人間の形成の上でも大切であり、学問を進めていく上にも大切であります。個人の問題、個の確立ということをよく考えていただきたいと思ひます。

次に第四の問題ですが、それは大学というのは、自由を尊重し自由を発展させるところであるといふことであります。国際基督教大学の創立の目的という文章を諸君はもうすでに読んでおられると思いますが、この大学の目的は「真理の追求と自由の高揚とにある」、自由を高めることにあると明記されております。自由を高めるといふのはどういふことか。第一に大切なのは大学はもともと自由の上に立っているといふことであります。大学というものは自由がなければ成り立たない。本質的な展開をすることができない。諸君は、大学の歴史を勉強なさいますと、何百年の間に大学の人たちがいか

に外部からの圧力に対して抵抗し、大学の自由を守ってきたかということがよくわかりだろうと思います。外からの社会的な政治的な圧力に対して私どもは自由を守らなければいけない。自由を守って初めて、学問の展開真理の探求が可能になるわけです。諸君は自由には責任を伴うんだということをおそらくもう耳のいたくなるほど繰り返し返して聞いておられるだろうと思います。大学において自由を高揚するためにまず我々はどのような責任をとらなければいけないかといえ、一番大切なことは人の自由を尊重してこれを犯さない、人の自由を束縛しないこと、これが大学の本質です。人の自由を束縛し大学における自由を犯すものに対しては、全力をもって抵抗しなければいけない。諸君一人一人が抵抗しなければいけない。これは大切なことであります。あらゆる大学のメンバーは自由の確保のために戦わなければいけない。諸君は自由というものがどういうものであるのかということに対して、鋭いセンスを持たなければいけません。いつどういう時にどういう判断をすれば大学の自由が損われるか。社会の自由が失なわれるかということに対して諸君は敏感でなければいけない。自由を損うものは何であるかといえ、いろいろなものがありますね、その中で特に大きいのは政治的な勢力です。大学の中に政治的な勢力が入ってくる場合、それは先生の間でも、学生の間でも、事務職員の間でも、政治勢力が入ってきてこれに左右される場合には大学の自由は崩壊してまいります。これは歴史的に大学の発展の跡をたどってごらんになれば明瞭なことです。私どもは政治的な関心を持つべきであります。社会的な責任をとらなければいけない。大学の一人として、あるいは社会の一員としてつよい政治的な関心を持つべきであります。しかし大学の中で、学問を研究し真理を探求する場においては政治が支配してはならない。政治というものは学問の自由を束縛する非常に危険な力を持っているのです。政治とならんで、というよりもっと大きな力で大学の自由に害悪をおよぼすものは、こ

れは暴力です。人の自由を自分の腕力によって、あるいは物理的力を用いることによって奪ってしまふ。物理的な力というのは、大きな音をたてるということもその一つであります。人の自由を腕力だとか物理的な力によって、暴力によって犯すことは、いかなる場合でも大学は拒否しなければいけません。暴力は問題にならないが学問の場で政治的な活動も拒否するというのは大学のたてまえであります。そうしなければ本当の真理の探求というものはできない。この大切な大学の自由、ある意味においてうっかりしておりますとくずれやすいもの、この大学の自由を守るために諸君がこれから勇敢に戦っていただきたいと思うわけであります。

大学に関する本質的な問題の四つをお話したわけですが、諸君は多くの大学の中で特にICUを選んで入られたわけですね。大学にはいろいろな名前がついています。地名をつけたもの、北海道大学、東京大学、筑波大学とか、こういうのがありますし、年号をつけたもの、慶応大学、明治大学、大正大学、昭和何々大学というような色々な名前の大学いろいろありますが、このICUは「国際基督教」という、この大学の方針と性格を名前に初めからつけている大学です。こんなにはっきりと何をやる大学かといっている大学は少ないですね。その大学に諸君は入ってこられた。これは諸君の選択で、さつき入学の宣誓をされたわけですね、宣誓というのは非常に重要です。「私はそれを本当に誓います。守ります」ということを諸君一人一人がきょう宣誓された。公に約束してこの国際基督教大学に入られた。ICUというのは非常に特色のある大学です。

いろんな特色がありますが、第一に教養学部制である。学部が一つしかない。いろいろな専門の先生方がおられますけれども、諸君の勉強する学部はただ一つです。いろいろな専攻が分かれたりします

けれども、他の大学とちがつて割合に自由にあつちこち動くことができます。教養学部であるといふことは現在世界的に変化していく大学を考える場合に大変に重要な問題であります。ICUの性質につきましては先程学長からお話がありましたので、あまり多くを申し上げませんが、この教養学部制の非常に大きなメリット、有利な点というものを諸君はよく考えて、これを生かしていただきたい。専門教育は必要であります。諸君も専門的な勉強をしていただきたいが、その前に大切なことがある。こういう変動の時代にあつて私どもは何を知らなければいけないか、一番必要なこと、本当に人間が学問するのは何のためであるかということを確認にしなければ、いくら専門をやっても、本当に社会に役立ち、人類に貢献することができない、そういう状況に今世界はあるわけです。日本もそういう状況の中にあります。諸君は先程申しました深い洞察力と、バランスのとれた常識と、そして社会に対する責任を自覚して、勉強していただきたい。それには教養学部の制度というのは非常に重要であります、教養学部の制度の中で諸君が勉強されているいろいろな不満がおこるだろうと思います。ほかの大学とちがいますから。しかしこの大学で教養学部の勉強をして、それからその先に専門教育、専門の勉強ができないかという、そうじゃない。この大学は非常に開かれた性格を持っている。先程学長がおっしゃいましたように、諸君がここで勉強することが、もし不十分ならばこの大学の全員が諸君にあらゆる便宜を与えるように、学外でも勉強できるようにとりはからつてあげるでしょう。この大学は非常に開かれた大学です。諸君が特別な勉強をしようと思えば、それだけにまた、あらゆるとはいえませんが、いろいろな道が開かれていると考へていただきたいと思ひます。諸君としてはこの教養学部制というものがどんなものか今はつかみにくいだろうと思ひます。我々も本当につかんでいるのかどうか疑問の起る場合があります。ですけれども、こういうような大学のシステムについ

ては、この方法によっていろいろな国々で多くの成功した結果がでていることを知り、また諸君が大学を卒業して、そして何年かたつて後をふりかえつて見る時に、初めてこの教養学部によさというものがわかるでしょう。そして専門教育、専門の勉強をなさりたい方には、それぞれの道が開かれているところを充分にいかしていただきたいと思ひます。

その次に先程学長のいわれましたICUは国際性という問題があります。今さら申し上げるまでもなく現在の世界、日本の現状というものは国際的な関係の中で動いており、その中で生きていかなければなりません。これは疑いもない事実でありまして、将来ますますそれが重要になるであります。諸君がこれから講義を聞かれる先生方として、今学年度の予定としては、私の理解では七カ国ぐらゐの、方々がおられます。学生諸君の方は二十カ国にはなつております。二十カ国あるいは二十一カ国の学生がこの大学におります。諸君がこの大学で接触する人は、こういういろいろな文化、いろいろな背景を持った人々です。諸君はこういう人々に接して国際的な環境で勉強をしていく間に、いかに世界が多様であつて、文化とか国とかいうものがいかにちがうものであるかということ、はつきりとかまえていただきたい。と同時にいかに文化がちがひ、いかに国がちがつても、人間というものとは本来は同じもので、一つであることを知り、どこに本当に私どもが人間として一つとなることができる根拠があるのかということ、諸君はこの大学にいる間にはつきりと把握していただきたい、自分で感じとつて、そして勉強していただきたいと思ひます。文化のちがひを知るといふのは決して簡単なことではありません。私どもは感謝の氣持というのは大変に大切なもので「ありがとうございました」といえる人になりたいと思ひます。ですけれども、感謝の氣持をどういふふうに表示するかというと、文化がちがうと大変ちがうことになりますね。ほかの人に対して本当に「ありがたかつた」

「うれしかった」「感謝します」という時に私もそれを口に出して申しますが、本当に感謝する時にはだまっているという文化がありますね。諸君はそれがわかりますか。本当に感謝するときはだまっている、こういう文化に外からきた人が接触をしますと、色々な誤解を生じるわけです、いかに人が何かやってあげても決して、ありがとうとはいわない。本当に感謝するとだまっている。インドの多くの地方でそういう感謝の態度がありますがご承知でしょうか。この場合、外に表明しない感謝の気持が共通にあることを知らなければなりません。とにかくこれは一つの例でありますけれども、異質の文化を理解するのは決して簡単なことではありません。文化がちがうと別なやり方があるもんだということをいつも問題として、注意していただきたいと思うわけです。

ICUの第三の問題はキリスト教であります。諸君の中にはキリスト教を信じている方がかなりあるでしょう。しかしキリスト教を信じないという人の方が多い。そちらのほうが恐らくは大部分であります。何れにしてもこの大学はキリスト教に基いて立てられている。先程のお話にもありますように、神に捧げられた大学であります。しかしこの大学は決して諸君にキリスト教を強要したりおしつけたりするところではない。大学はどこまでも真理を探究するところであります。キリスト教をおしつけません。だけれども諸君は自分でえらんでキリスト教大学というところに入ってこられたわけですね。これはキリスト教というものから、諸君はチャレンジを受けている、問題を出されているということを意味します。我々一人一人どう考えるかということです。キリスト教のチャレンジ、キリスト教の投げかけている問題には非常に大きい問題がたくさんあります。愛と憎しみの問題であるとか、裁きと許しの問題であるとか、生と死、永遠の生命の問題であるとか、普通の学問、科学の中で扱わないようないろいろな重要問題が提出されているわけです。こういう問題に関して、キリ

スト教が問いかけているということです。それを受け入れないなら、受け入れないだけの根拠をもって、我々は生活するべきでありますね。こういうようにキリスト教から出される問題はたくさんありますけれども、私はここで大学の本質である真理の探求とむすびつくいくつかの問題を考えてみたいと思います、時間がありませんので二つほど挙げてみたいと思います。

いったい現在の世界も大学も変革する時期に科学というものが人間の知識の中でどういう位置を占めるだろうかということが問われております。私どもは科学を信用し、技術にたよって生きてきたけれども、果してそれだけでいいのだろうか。我々が知ることのできる事実、私にわかるばかりでない、他の人にもわかる事実を求めまして、事実に基いて私どもの考え方を作り上げるといのが科学の常道、実証科学の性質であります。学問は実証科学だけではすまされない。私どもは哲学を必要とします。哲学という言葉は暖味に使われる場合がありますが、とに角我々の生き方、考え方の根本を問いなおしてみる必要がある。そればかりでなくて科学を越え、哲学にとどまらないで、広い意味の宗教を必要としています。私どもがすべてを捨てて、その前にひれふさなければならぬような何ものかの権威を必要とするのではないかと問われているのが現代であるといってもよいかと思えます。しかも一方で広く人間の生活水準と人権が問題とされている。この時にあたってキリスト教は問題を提出しております。神の前にすべてのものを捨てる。神の権威の前にはすべてのものは無に等しい。そういう考え方があると同時に、人権の尊重の考えが強く出ている。人間の考え方として個人を尊重することが大事だと申しましたが、先程の入学式の中には人権という考えが入っていました。諸君の宣誓の中にはいました人権宣言です。人権とは何か。人間の犯すことのできない基本的な権利、これはどこからくるのでしょうか。キリスト教ではそういう考え方について人間観というものが問題

になります、キリスト教の人間観というのは、神が人間を作った、人間は神になぞらえて作られた、つまり神的な性質をもっている、神的な性質をもっていてしかも大きな傷がある、大きな欠陥があり、重大な罪をもっているというのがキリスト教の人間観です。諸君は人間の性善説とか性悪説とかいろんな思想があることを聞いておられるわけですが、キリスト教の人間観というものはそういうものですね。それでは世界の人權思想、民主主義の基本となる人權思想というものがどこから来ているのか。民主主義という言葉は非常に曖昧でいろいろの意味で使われますけれども、研究をやってみますと、この人權思想の根本はキリスト教と密接に関係していることがわかります。私も小さなグループを作って人權思想に関する研究をやってみましたことがありますが、どうも歴史的にさかのぼってみますと、その起源はキリスト教の人間に関する考え方から出ているようです。それがいろいろなところに影響して、いろいろな形をとって現れておりますけれども、キリスト教の思想なしに果して人權思想ができたかどうか疑問であります。これは諸君がこの大学で研究される一つの大きな研究問題だと思えます。とにかくそういう問題をキリスト教は出しているのです。もしも人間がただの物質の塊りであるならば、ほかの人間を無視しても大したことはない、あるいは殺してしまってもどうということないではないかという考えさえ出てこないとはいえません。一人一人の人格の尊厳性、人格の尊厳性の背後にある神聖性という考え方がなくて本当に心から人間を尊重できるでしょうか。という問題をキリスト教が投げかけています。これは一つです。

もう一つだけ申し上げてみたいと思いますが、それは我々が最終的に権威として尊ぶものは何であるか。私どもがその前にすべてを投げすて、権威としてあがめるものは何であるかということであります。キリスト教は明確でありまして、これは唯一の人格神であります。エホバの神といわれており

ます唯一の人格神で、それ以外に權威を認めないわけです。先程申しましたように學問というものはどこまでも進歩して参ります、我々はいろんな學説を教えられたり作ったりしますが、それは次々に壊されて新しいものが立てられていく。私どもはどの學説も、どの人間の考え方も絶対とすることはできません。キリスト教では絶対なものは神だけであります。我々が政治的な考え方でも、學問の考え方でもこれが動かない、絶対であると考えたとすれば、それは進歩の終りであります。學問の考えというものは次々に進歩している。無限に進歩するといつていいもので、それを絶対化することはできません。自分の考えていることを絶対化することはできないわけで、我々はどこまでも謙遜でなければならぬ。謙遜が學問の基礎にあるということは先程申しましたが、本當に謙遜であるためには何が必要であるのか。私どもがすべてを投げうってその前にひれふす神がない場合に、私どもはどうなるかというとか別なものを神としてあがめる。神とはちがう別なものを尊重する。尊重するばかりでなくて絶対の權威とするというあやまりに落ちいりがちじゃないでしょうか。この問題をキリスト教は投げかけております。キリスト教は偶像を排斥します。人間の手で作ったものを崇拜することを排斥します。これはユダヤ教もキリスト教もイスラム教もそうです。私どもは人間の手で作ったもの、何かここに何か人間や動物の形をした神様の像でもあれば、これが偶像であるということとはだれでもすぐわかりますね。しかし人間が頭で作り上げてきたものが、それが偶像の性格を持っている、絶対の力を持っているというときに、それが偶像であるということを見破ることは必ずしも容易ではありません。ことに神から作られたと考えられるもの、人間とか自然とかいうものに対して、我々が考える考え方というのは何か神に近いものであるような気がしてまいります。學問のある分野では、どうもこれこそ絶対であるというものが考えられやすい危険があるわけです。しかしこれもやはり基

本的な性格としては偶像であります。イスラム教の本で、イブン・アル・カルビーという人の「偶像の書」という本があります。偶像のことばかり書いた本ですが、その「偶像の書」の初めのところに、神の被造物、神に作られたものを神の仲間として並べておいたこと。これが偶像崇拜として大きな欠陥であることが指摘されております。神によって作られたものを神と並べることは偶像崇拜でありまゝす。イスラムの偶像崇拜観は非常にはつきりしております。私どもは現代の偶像に対して戦わなければなりません。そうでなければ学問の世界で本当の自由と本当の生命は発展というものは期待できないでしょう。そういう問題をキリスト教は投げかけているということです。私はこういうようないろいろな問題について諸君が深く考えてくださることを期待しているわけであります。

諸君はこれから勉強をはじめるといろいろなむずかしいカリキュラムがあるかもしれませんが、しかし大体において大学生の生活というものには暇があると思います。高等学校にいて入学試験の勉強をしていた時代から考えますと暇があると思います。問題はこの暇をどういうふうに使うかということ、ラテン語のスコラ、ギリシヤ語のスコレー、すなわち暇という字からきています。学校は暇があるというより暇がなければほんとうの学問はできない。暇を使って勉強する。先程申しましたように、これから我々が作り出している学問は、我々がどういうふうに自由な時間を使い開拓していくかということ、これは諸君一人一人が自由にできる時間をどう使うかということとはまったく諸君一人一人の責任ですね。これほど明確なことではない。我々一人一人どういうふうに将来に向かって歩いて行くか、自分自身を作っていくかという分かれ目は、自由な時間を、あっちに使うか、こっちに使うか、ということ

ですべてが決まるというてもいいわけでしょう。諸君はきょう入学式を終えて、いわばスタートラインの一線上に立って、これから行動を始めようとしているわけです。諸君の中には非常な秀才、才媛がいるかもしれないし、そうでない凡才がいるかもしれない。生まれつきはいろいろちがう、教育がちがう、家庭の状況がちがう。その他いろんな条件がちがひまして、ここに在る現在諸君は一人一人まったくちがう人間であります。それが同時にスタートされるわけです。私は私のある友達の外でほめられた話を一つ思い出します。私の友人のその大学の先生は外国語が不得手だった。外国に留学したんですけれども、言葉がしゃべれない、わからない。そこで語学の学校に入ったわけです。数ヵ月たつて少しはわかるようにはなつたけれども、とうていむずかしくてよくわからない。本當に困つていた時に、その学校の先生が私の友人をつかまえてこういうことをいった。「あなたは実にいい生徒です。この学校に入つてから、今日までにこんなに進歩した人はありません。」その人の努力と能力を、ことに努力を高く評価したわけです。その入は数ヵ月たつても決して語学のよくできる人ではなかつたけれども、初めからみると大きな進歩をしたわけであります。諸君一人一人はこのICUの生活を送る間にいろんな進歩をされるだろう。私が期待しているのは、諸君が現在どういう能力を持ち、どういう状態にあるかということではなくて、諸君が同じようにきょうスタートして、そしてこのICUで生活する間に、どれだけ学問的にまた人格形成の上で進歩するかということです。私の諸君に対する期待は、諸君がここで進歩することにあるわけです。大学というものはすべて動いていてとどまることを知りません。私も大学の人々がすべて進歩していかなければなりません。諸君に対して進歩を求めるといふことは、私も自身がみんな一緒に進歩しようということです。諸君と一緒に進歩しなければ、大学は、生命のないもの、生命の失われたものになる危険が大きいのです。私

は諸君の進歩を期待すると同時にまた大学の進歩を期待してこのお話を終りたいと思います。長い間、聞いて下さってありがとうございました。

著 者 山 本 敏 夫

〒101-8301 東京都港区三田3-10-1
山本敏夫 著

一 冊 内 大

〒101-8301 東京都港区三田3-10-1
山本敏夫 著

山 本 達 郎

1910年生

東京帝国大学卒 文学博士 (アジア史)

国際基督教大学教授

東京大学名誉教授

日本学士院会員

国際学士院連合副会長

国際オリエント・アジア研究連合副会長

著書

安南史研究(一) (山川出版社 1950)

歴史の見方 (三省堂 1957)

デリー諸王朝時代の建造物の研究 (共著)
(東京大学東洋文化研究所 1967~70)

「ICUの学生に期待するもの」

1974年6月30日

第一刷発行

著 者 山 本 達 郎

発行人 東京都三鷹市大沢3-10-2
国際基督教大学 学生部

大 内 謙 一

印 刷 一誠社綜合印刷株式会社
